

我々の社会における『安心』と『リスク』 —主として「食」の問題を題材に—

神里 達博

近年、我が国においては、地震や水害などの天災、鉄道などの人為的事故、BSE や O-157 といった健康問題など、広い意味での「安全」を脅かす出来事が頻発してきた。そのため「安全」「安心」「リスク」といった言葉は、時代のキーワードとして定着してきている。これらは非常に基本的な概念であるがゆえに、それ自身が改めて省みられることは、さほど多くはないが、実のところ、それぞれ異なる背景を持った言葉である。

今回は、1)上記の概念を若干丁寧に検討することを試み、2)また、主として「食」の問題をその具体的事例として採り上げた。更に 3)近年のリスク政策のモデルを一部紹介し、議論の契機となることを狙った。ここでは紙面も限られているので、以下、1)についての概要のみを述べたい。

1. 「安心」

文部科学省が設置した「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会報告書」によれば、安全とは「人とその共同体への損傷、ならびに人、組織、公共の所有物に損害がないと客観的に判断されることである」としている。一方で「安心」については、「個人の主観的な判断に大きく依存するもの」とし、いくつかの見解を示しながらも、そこで明確な定義は行っていない。少なくとも「安心」は「安全」に比して主観性の高い概念であることは間違いない。これは、元々「安心」の語が仏教用語に起源を持つことから了解しうるだろう。

近年、この 2 つの言葉は公共的なシーンにおいて「安全・安心」として一括りで語られることが多くなった。したがって、そのことの影響を検討しておくことは重要であろう。簡潔に述べるなら、「安心」は客観的な指標を立てにくいがゆえに、それが一旦政策目標などになると、どこまで「安心」を追求すべきかという基準が立てにくい。このこと

は、「安心」と例えば「自由」や「(新しいもののへの)挑戦」、また「多様性」といった他の価値を侵食する可能性があることを意味する。では、どうすべきか。「何事もバランスは重要である」というのは陳腐な結論だが、しかし、依然として重要な観点であるのは間違いない。

2. 「リスク」

一方、「risk=リスク」は言うまでもなく外来語である。実は、この語は近代的な精神と結びつきが強く、17 世紀頃に登場した比較的新しい言葉である。より古い類義語として *danger* があるが、最も大きな違いは、「リスク」には「人間が進んで何かに挑戦する」という含意がある点だ。すなわち、「自由」と「リスク」はコインの裏表の関係なのである。自由の無いところにはリスクもないのだ。したがって、科学技術が進み、人間の手にする自由・可能性が増せば増すほど、「リスク」は増えるというアイロニーがここに存在する。

さて、我が国において、この言葉が使われる場合は、主として貿易や保険などに以前は限定的されていた。しかし、新聞紙面の定量的な分析からも、この語が 1990 年代後半に一般的な用語として定着したことが推測できる。これは、いわゆるグローバル化の波に日本社会が晒された時期とも一致し、その意味で、「リスク」はいわゆる「第三の開国期」に上陸してきた概念だとも言える。だが、我々はこの言葉をまだ自らの歴史的な文脈の中に位置づけることはできていない。未だに「カタカナ」で表記されていることも、その 1 つの傍証であろう。今後、我々の社会がいかなる方向に進むかにも大きく依存することだが、この言葉をたとえば「虎穴に入らずんば虎児を得ず」や「覚悟」といった使い慣れた言葉と比較しつつ、我々の社会にとってのその意味を再検討しておくことは、ますます「リスク社会」の様相が深まる中にあって、重要なことではないかと思われる。

主要文献：神里達博『食品リスクー BSE とモダンニティ』(弘文堂, 2005)、神里達博「社会はリスクをどう捉えるか」(『科学』10月号, 岩波書店, 2002)、神里達博「安全・安心言説の登場とその背景」(『科学技術社会論学会誌』, 玉川大学出版部, Vol3, 2004)

(文責：高橋克也)